

「生まれた」ことと「生きる」こと

上 廣 榮 治
うえ ひろ えい じ

ある年配の会友さんが嘆いていました。近所に、いつも子どもを叱っているお母さんがいるというのです。ときには、「あんたみたいな子、産むんじゃなかった」と大きな声を出し、子どもは激しく泣きながら「ごめんなさい」を繰り返す、そんなやりとりを聞くのがせつないとおっしゃるのです。

叱っていた親も泣きじゃくっていた子も、しばらくすれば仲直りして、いつもの笑い声が聞こえてくるのかも知れません。それでも、「その言葉だけは禁句だと思えます」というのが、その方のご意見でした。

たしかに、「産むんじゃなかった」というひと言は、子どもの心を傷つけそうです。それが言葉のはずみなら「擦り傷」程度ですむかもしれません。その後のやり取りいかなんでは、かえって親子の絆を強めるきっかけになることも、ないとはいえません。しかし、その感情的なひと言が、子どもの心に取り返ししのつかない深い傷を与えてしまうことだって、あり得ます。

逆の立場から考えてみましょう。子どもから「あなたの子として生まれたくなかった」と言われたら、親として平然と受け入れることができるでしょうか。軽い気持ちで言っているのがわかれば、受け流せるかも

しれません。しかし、本当にそう思われていると感じたら、深く傷つくに違いありません。母親の「産むんじゃないかった」というひと言は、それと同じ傷を子どもにも与えているのです。

母親は子どもを「産んだ」と言い、子は母親から「生まれた」と言います。子どもにとって誕生することは、自分では選びようのない「受け身」の出来事です。それなのに、母親のその発言は、子どもの存在そのものを否定しているのです。その理不尽さに、反抗期の子どもなら「こっちだって好きで生まれてきたんじゃない」と言い返すところでしょうが、幼い子ではそうはいきません。

「産んだ」と「生まれた」、そのことがまだ頭のどこかに引つかかっていたある日、あるきっかけで、高校の国語の教科書に載っている一篇の詩に出合いました。子どもが「生まれる」ことの意義を問うた「I was born」(作・吉野弘)という散文のような詩です。

この詩は、英語を習い始めたばかりの少年がある夏の宵、父親とともに寺の境内を歩いていて、ひとりの身重みおもの女性と出会うところから始まります。少年はそのとき、「へ生まれる」ということが、まさしく「受身うけみ」である訳わけを、ふと諒解りょうかいし、興奮して父に次のように話しかけるのです。

「I was born」よ。受身形だよ。正しく言う人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね」

少年は英文法の構造を納得しただけなのかもしれません。しかし、彼の発言は、いろいろなことを思い起こさせます。すなわち、子どもはいつどこで生まれるかを自分で選ぶことができない。それどころか、誕生すべきかどうかを選択することさえできない。自分の親を選ぶこともできず、性を選ぶことも、顔や体を選ぶこともできず、一生ついてまわる名前さえも自分で決めることができない……。

こう挙げていくと、子どもはたかさんの不自由を背負ってこの世に現われることがよくわかります。では、子どもたちはどのように成長し、生きていく意味を見いだしていくのでしょうか。

子どもの心の成長とは、自分の意思と関係なく始まった自分の生を「かけがえないもの」として受け止め直すことであり、自分とそのまわりの世界を肯定的に捉え直すことでもあります。言い換えれば、自分には責任がない「受け身」の立場をひっくり返して、生きることに責任を持つていこうとする過程です。

そのような転換を可能にするのは、子どもの生を肯定し尊重してくれる大人たち、とりわけ家族の存在でしょう。子どもが自分を否定的に捉えず、「生まれてきてよかった」「この親の子でよかった」と思うためには、まず家族がその子どもの存在を全面的に受け容れ、肯定しなければなりません。

私たちが唱える「家庭愛和」も、家族の一人ひとりが自分の家族を愛し、互いの役割を尊重し認め合うことから始まります。親が子どもの存在に感謝の気持ちを持つていなければ、子どもも親に対する感謝の気持ちを持つことはできません。そう考えれば、「産むんじやなかった」という、子どもの存在を否定するような言動は、ぜひとも避けなければなりません。

さて、先ほどの詩に戻ります、少年の言葉を聞いた父親はしばらく無言で歩いたあと、「かげろう蜉蝣」の話をしはじめます。生後二、三日で死んでしまう蜉蝣は、いったい何のために世の中に出てくるのだろう。そのことがひどく気になっていたとき、友人から拡大鏡で蜉蝣の姿を見せられたと、父は言います。

拡大鏡に映った蜉蝣の雌は、口が完全に退化していて食物を摂ることもできません。ところが、卵だけは腹の中に充滿みみしていて胸のほうにまで及んでいます。父親はこれを「目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが、のど咽喉もとまで こみあげているように」見えたと言います。そのことがあってからまもなく、「お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれた」と伝えるのです。

少年の父が蜉蝣の話によって伝えたかったのは、「お前を産んだせいで母親が死んだ」という否定的なことではありません。母親が命を賭してまで守ろうとした生命の尊さを、我が子に知ってもらいたかったのだ

しょう。そして、少年もそのことをしっかりと受け止め、授かった生命を大切にすることで、母の愛に応えていく、そのことを予感させて詩は終わります。

普通の父親は、なかなか少年の父のように気の利いたことを言うことはできませんし、それで一向にかまわないのです。子どもの存在を肯定し尊重していさえすれば、言葉などは必要ありません。それこそ、後ろ姿で示せばよいのです。

念のために申し添えておくなら、子どもを尊重することは決して過保護にすることではありません。過保護とは、子どもを尊重することでも保護することでもなく、親の勝手な願望を子どもに押しつけることにすぎないのでから。

身勝手な親たちが発するのは、「産むんじゃないかった」という言葉だけではありません。時には、「お前は橋の下から拾ってきた」「あんたさえないなれば」「私の子どもだと思おうと恥ずかしい」というように、表現を変えながら、言葉の凶器を子どもたちに浴びせ掛けます。親の願望や弱さを子どもに押しつけているという意味では、過保護や過干渉と同じ土俵の上にあるといつてよいでしょう。

そうした、子どもの自発性を伸ばす「誉め育て」や子どもと適切な距離をおく「捨て育て」とは対極にある子どもへの対し方、その一つ一つが子どもの自立を大きく阻んでいることを、親はもつと自覚すべきです。「生まれる」ことは自分の意志ではどうにもならないことです。しかし、「生きる」ことは違います。人は自分の意志で、自分の責任で、どう生きていくかを選んでいくことができるのです。「生まれた」ことから「生きる」ことへの転換。すなわち、受け身であった生命を、子どもが「かけがえのないもの」として肯定的に捉え直して、「より善く生きていく」ためには、子どもの善さを認め、その役割を尊重してくれる、愛和に満ちた家庭こそが、その善き温床おんしょうとなるのです。